

言語使用におけるアイデンティティ要因の検証方法

—アイルランド英語における社会的意味の交換と話者要因関与調査—

嶋田珠巳 (明海大学)

1. はじめに

本研究発表では、言語使用に影響を与えていると考えられる、話者の「アイデンティティ要因」の検証方法について考察する。ここで「アイデンティティ要因」と括ったのは、話者の帰属と志向性を中心としたものであり、特に、場所的な帰属と志向性との関連を見る。予稿集には、その前段として考察した事ごらを中心に記載する。発表においては、発表者がアイルランド南西部において現在おこなっているアイルランド英語(Hiberno-English, Irish English)の調査データをもとに社会的意味の交換について考察し、言語使用における話者のアイデンティティ要因の関連を明らかにするための調査の一部を紹介しながら、検証方法を検討する。全体を通して、話者関与の言語理論の考察に繋げたい。

2. 問題の所在：「アイデンティティ要因」とその研究可能性

2.1 言語研究におけるアイデンティティの問題

「言語とアイデンティティ」は話者を含めた言語理論あるいは社会を含めた言語学を考えると、それを要として必要な考察をおこなうハブになり得るテーマであるが、「アイデンティティ」は何かを実証するといったことには不向きなところがある。人口統計的な属性ほどに明確に規定できるわけでも、何か一つの指標でもって測れるものでもなく、複数の要素の関わりにおいて個人および集団の文脈で成り立つ概念であるためであろう。さらに、現代においてアイデンティティが多様かつ流動的であることにも考慮を要する。これまでの社会言語学研究を見ると、言語による集団的アイデンティティの表示(identity-marking)と言語による個人的アイデンティティの構成(identity-making)の両面から研究がなされている。とくに初期にはアイデンティティ表示への着目がことばのバリエーション研究をたすけ、社会言語学研究の発展にともなってほしいにアイデンティティ構成に研究の重心が置かれるようになる(嶋田・三上, 2023)。社会言語学が萌芽的な段階を越えた頃にはアイデンティティ概念による説明を躊躇する方向に傾き、アイデンティティが言語特徴の「原因」になることはないという「相関性の誤謬」への指摘がなされている(Cameron, 1990; Trudgill, 2004; Benwell & Stokoe, 2006)。

2.2 Labov (1963) : 音変異の社会的意味

Labov (1963) のマーサーズビンヤードの研究は「アイデンティティ要因」の関わりを示す良例である。例えば、right や house といった語の二重母音/aɪ/ /aʊ/を[ai] [au]ではなく中舌化した[əɪ] [əʊ]と発音することの意味を Labov は探る。中舌化が summer people の侵入に対する抵抗の表現であり、その意味は“Vineyarder”であるとした。言語特徴とその使用者の「島に属している」というアイデンティティとの関連を示唆した研究である。

2.3 言語変化における話者役割

言語変化の説明に関しては、「話者」を抜きにして言語変化は語れないとわかりつつも、おそらくは検証の難しさからアイデンティティ要因は敬遠されがちであった。話者のアイデンティティと言語使用に関する妥当な理論の検討を進めるとともに、アイデンティティ要因の良い検証方法が見つければ、このような問題にも突破口があるのではないかと考えられる。

2.4 アイルランドにおける言語アイデンティティ

アイルランドの文脈において言語のことを考え始めると、「言語とアイデンティティ」に触れずに理解できる言語事象が少ないことに気づく。たとえ「アイルランド英語」の言語的性質だけにフォーカスして観察したくとも、話者との調査セッションの折には、言語形式への言語外的な意味が言及される。そしてその言語外的な意味は、話者の言語意識に裏打ちされている。言語交替(language shift)の経験が言語アイデンティティにも関わっていると考えられ、さらに言えば、アイルランド英語の文法を見るにも、話者の言語意識を解するにも、アイルランド語の存在は外せない。長い歴史のある土着の言語から英語への言語交替を今日までに経験したアイルランドは、言語とアイデンティティの諸問題を考察する素材を提供している。

3. 言語使用とアイデンティティ

3.1 アイデンティティの定義

発表者は、アイデンティティを、内面化された価値基準と自我理想を含み、自己感覚の統合された状態として捉える(三上, 1993). すなわち、個人的アイデンティティを構成するのは、(好むと好まざるとにかかわらず、各人にそなわる)帰属と(こうありたいという)志向性であり、その帰属・志向は各属性のもとに形成された集団の想起によって指標される。アイデンティティは属性のみに帰することができない。

3.2 アイデンティティ表示とアイデンティティ構成

言語とアイデンティティの関係は、言語が集団的アイデンティティを表示するアイデンティティ表示、個人的アイデンティティの構成に言語特徴が用いられるアイデンティティ構成の二つの方向からその相互性において捉えられる(嶋田・三上, 2023). 話者の自我理想のもとにアイデンティティ構成はおこなわれるが、同時に、社会の承認を経てアイデンティティ表示として機能することが言語形式を用いた指標の生成の条件となる。

3.3 社会的意味の交換

社会的意味の発生と定着については記号の指標的性質から考察できる(Silverstein, 2003; Agha, 2007; Eckert, 2012; Drummond & Schlee, 2016). 言語形式はある集団やパーソナリティと関連づけられ、社会的アイデンティティがいったん作り出されると、言語的文脈がなくとも、その特徴はその集団、その人たちを指示する“permanent link”となる。ある形式がいったん登記(enregister)されると、アイデンティティカテゴリはイデオロギー的に拡張し、繰り返されることで非直接的な指標性が現れる。指標行為をくり返すと、指標の慣例化が起こって言語形式と社会的意味のリンクができる。

4. アイルランド英語と話者のアイデンティティ

4.1 アイルランド英語の言語特徴とアイデンティティ

これまでのアイルランド英語研究において、文法特徴はFilppula(1999)などに詳細な記述がなされ、それら特徴的な文法形式に対する話者の主観的評価についてはShimada(2016)による調査がある。アイデンティティを編著のタイトルに含むHickey&Amador-Moreno(2020)は根拠のないままに「アイルランド人が自分たちの言語アイデンティティを祖先のアイルランド語から現在話しているアイルランド英語に移行させている」と述べているが、これには疑義が生じる(嶋田, 2023). 言語それ自体のもつ指標的な性質ゆえに、アイルランド英語はアイルランド語ほどには“identifier of Irishness”になれない。アイルランド英語が独自の言語特徴をもつことでもって、使用者にそのアイデンティティを帰することはできないのである(2.1 参照). アイデンティティが言語に働きかける側面ないし談話において構成されるアイデンティティについては、実際の言語使用データからの検証が必要である。

4.2 「アイルランド的」であると評価される言語特徴

言語形式の言語外意味は、その言語形式に対する話者の主観的評価でもって記述することが可能である。Shimada(2016)は11 特徴 26 文に関する話者の評価を調査し、文法形式に対する、話者の{使用/不使用}、{アイルランド的である/アイルランド的でない}、{正しい/正しくない} 評価には、顕著な違いが見られたことを報告している。例えば、習慣を表す *do be V-ing* 形式と完了を表す *be after V-ing* 形式ではアイルランド英語話者はいずれも同じ程度に「アイルランド的」であると評価するが、*do be* のほうは「悪い文法」と判断されて不使用評価が高いのに対して、*be after* では「悪い文法」評価が低く使用評価が高いといった違いがある。標準的な英語では現在完了で表され、日本語の「～(し)ている」が訳出にちょうど合う *be V-ing* 継続は、*do be* 習慣や *be after* 完了に比べて、話者の言語意識には上らない形式である。

O'Sullivan(2020)はラジオ広告におけるデータから、アイルランド英語に特徴的な *now* (例: *OK now move along now please*), *sure* (例: *But sure Dave, you picked it*)などの用例をあげ、これらの談話標識がアイリッシュアイデンティティの標識として用いられていると分析する。これら語用法に関わる言語形式も、形態統語法に関わる言語形式、語彙形式と同様に、社会的意味の発生と定着を捉えることができる。

4.3 「アイルランド的」指標の交換

アイルランド英語の談話データを見ていく。話者がどのような言語特徴に「アイルランド性/ローカル性」(Irishness)を見出すかについては5.3の調査を踏まえて分析し、その社会的意味の表出や交換がどのようにおこなわれているかを観察する。

5. アイルランド英語使用におけるアイデンティティ要因の検証方法

5.1 現在の「アイルランド英語話者」

アイルランド共和国の昨今の社会言語環境は大きく様変わりしつつある。アイルランド英語を話す言語コミュニティは現在ではそれを母語とするアイルランド人だけでなく、その他のエスニシティの住人をも含んでいる。2022年の国勢調査によると、アイルランド共和国の定住人口の20%は国外生まれである。さらに、アフリカなどからの居住者にはアイルランド生まれの人口が増えつつあり、いわゆる移民2世の人たちもコミュニティに含まれる。

5.2 “新しい話者”という鍵

何世代にも渡って土地に暮らすネイティブのアイルランド英語話者に対して、移住して新たにアイルランド社会に入った人たちを「新しい話者」(“new speakers” of Irish English)として捉え、彼らの言語使用とアイデンティティ要因の調査をおこなう。談話インタラクション調査においては、新しい話者どうしおよびネイティブ話者との会話データを分析する。

5.3 アイデンティティを知る質問と回答の評価

現代人のアイデンティティは多様であり、当然のことながら、言語使用において構成されるのは“being Irish”や“living in Ireland”といったアイルランド志向のアイデンティティだけではない。そのことを考えに入れた工夫を施す必要がある。新しい話者の場合には「アイルランドは好きですか」といったインタビュー時の会話のきっかけからも、また「これから先もアイルランドで生活したいと思うか」などの質問回答からも、話者のアイデンティティに関して知る手がかりが得られる。インタビュー調査およびアンケート調査においては質問項目の設定によって「フォーカス効果」(嶋田・三上, 2023)が掛かるものである。それをむしろ利用してアイルランド性/ローカル性の抽出をはかることをまずは考えているが、一人の言語使用者という観点からは他の属性の集団アイデンティティの表示と個人アイデンティティの構成が観察される可能性もある。広い視野でのデータ分析によってローカル性指標はより明確化されると考えられる。ローカルアイデンティティの評価にあたっては、アンケートにおいてスケール評価項目を設けつつも、インタビュー内容と合わせた上で評定を出す。

5.4 調査の内容と現時点での課題

本稿執筆時においては調査の準備段階にある。発表時にはより具体的な検討を可能にしたい。

謝辞 本研究は、文部科学省科学研究費 国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(A))「言語知識と言語変化—アイルランド英語使用データに基づく社会的意味形成の理論と検証」(22KK0193)の助成を受けている。

参考文献

- Agha, Asif (2007). *Language and social relations*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cameron, Deborah (1990). Demythologizing socio-linguistics: Why language does not reflect society. In Joseph, John E., & Taylor, Talbot J. (Eds.), *Ideologies of Language*, pp.79-93. London and New York: Routledge.
- Drummond, Rob, & Schlee, Erik (2016). Identity in variationist sociolinguistics. In Preece, Siân (Ed.), *The Routledge handbook of language and identity*, pp.50-65. Oxton and New York: Routledge.
- Eckert, Penelope (2012). Three waves of variation study: The emergence of meaning in the study of variation. *Annual Review of Anthropology*, 41, 87-100.
- Hickey, Raymond & Amador-Moreno, Carolina P. (2020). *Irish identities: Sociolinguistic perspectives*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Labov, William (1963). The social motivation of a sound change. *Word*, 19(3), 279-309.
- 三上剛史 (1993). *ポスト近代の社会学*. 世界思想社
- Ochs, Elinor (1992). Indexing gender. In Duranti, Alessandro, & Goodwin, Charles (Eds.), *Rethinking context: Language as an interactive phenomenon*, pp.335-358. Cambridge: Cambridge University Press.
- O'Sullivan, Joan (2020) *Corpus linguistics and the analysis of sociolinguistics change: Language variety and ideology in advertising*. Oxton and New York:Routledge.
- Shimada, Tamami (2016). Speakers' awareness and the use of *do be* vs. *be after* in Hiberno-English. *World Englishes*, 35, 310-323.
- 嶋田珠巳 (2023). 現代アイルランドの言語アイデンティティ. 明海大学大学院応用言語学研究, 25, 1-17.
- 嶋田珠巳・三上剛史 (2023). 言語使用とアイデンティティ構成—社会言語学と現代社会論の交差. 社会言語科学, 25(2), 9-24.
- Silverstein, Michael (2003). Indexical order and the dialectics of sociolinguistic life. *Language and Communication*, 23, 193-229.
- Trudgill, Peter (2004). *New-dialect formation: The inevitability of colonial Englishes*. Oxford: Oxford University Press.